

## 方形壇をもつ古墳

古墳時代中期（5世紀）の大阪府堺市の大仙古墳（伝仁徳天皇陵）までは、時の権力者は大きく墓（古墳）を造ることに労力・意識が働いたようです。大仙古墳以後、ヤマト政権が安定して取って代わり権力を誇示する必要がなくなり、古墳規模の縮小化が見られます。天皇陵クラスの大規模な古墳は、奈良県橿原市見瀬丸山古墳を最後に前方後円墳を造られなくなります。

京都府内での最後の前方後円墳の可能性が高い古墳は、京都市右京区にある蛇塚古墳（6世紀後半）です。蛇塚古墳以降も京都府内では円墳・方墳が造り続けられますが、その規模は縮小していきます。こうした7世紀以降に造られた古墳のなかに、墳丘の表面に石を積み上げて石垣状の方形壇を造ったものがあります。

京丹後市上野2号墳は、7世紀前半に造られた古墳で、元の周溝を改変して方形に石垣を積み上げて壇状に成形しています。

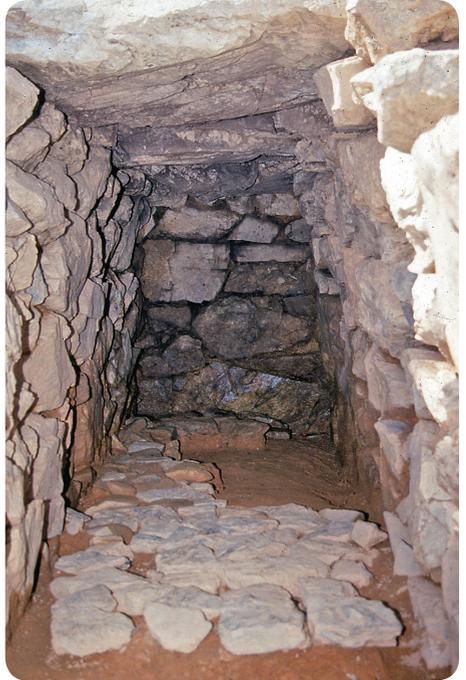
方墳の前庭部に上下二段の方形壇が付設する、終末期の古墳に特徴的な墳丘形態の古墳に綾部市山尾古墳があります。山尾古墳の墳

丘は東西約9.0m、前庭部の方形壇の下段幅は推定約21.4mを測ります。石室は自然石の乱石積みによる無袖式横穴式石室です。床面はすでに盗掘されていましたが、須恵器が少しだけ出土しました。



方形の石列が築かれている山尾古墳

方形壇を付設する終末期の古墳は、西日本の各地で約10例を数えます。最も発達した方形壇をもつ墳墓は、舒明天皇陵に比定され、実際にその可能性が高いとされる奈良県桜井市忍坂にある段ノ塚古墳です。段ノ塚古墳は、八角墳の前面に左右幅約105mにわたる3段積みの方壇をもつ7世紀中葉の大規模な墳墓です。このほかにも、明日香村の岩屋山古墳や、孝徳陵説がある叡福寺北古墳も方形壇の存在する可能性が指摘されています。



石室床面に敷かれた平石（山尾古墳）

舒明天皇陵が方形壇を備えた八角墳であることから、八角墳は、中央集権国家体制の祖となった舒明天皇の皇統に属する皇族の墳形として認識されていた可能性がありま  
す。方形壇は八角墳を採用する天皇陵において定形化したのち、方壇を主墳丘とする一部の墳墓にも採用されていきました。山尾古墳は、主墳丘と方形壇が明瞭に区分されるもので、より古い形態を示しています。石室形態や出土土器などから、おおよそ7世紀第3四半期頃の築造と推定され、八角墳から方墳に方形壇が取り入れられた最初期のものと考えられます。

山尾古墳の被葬者は、段ノ塚古墳に類似する墳丘形態に加えて、後代の文献『三大実録』には周辺の何鹿郡の郡領に舒明天皇の皇統と関連の深い刑部氏の名が見えることなどから、舒明天皇の皇統に近侍した人物だったのではないでしょう。

（高野陽子）